



| 時期   | 群馬県       |                            | 長野県   |            |            |           |      |               |      |           | 隣接間地域交流          |                   |                           | 茨城県との交<br>流  |     |     |     |    |   |
|------|-----------|----------------------------|-------|------------|------------|-----------|------|---------------|------|-----------|------------------|-------------------|---------------------------|--|-----|-----|-----|----|---|
|      | 群馬県<br>樽式 | 群馬県<br>富岡市<br>南蛇井増<br>光寺遺跡 | 佐久盆地  | 長野盆地<br>南部 | 長野盆地<br>北部 | 諏訪湖<br>南部 | 松本盆地 | 上伊那・諏<br>訪湖北部 | (橋原) | 上伊那<br>南部 | 飯田盆地             | 佐久(周防畑遺<br>跡)への流入 | 富岡(南蛇井増<br>光寺遺跡)への<br>流入  |  |     |     |     |    |   |
| 前葉   | 1期        | 1期                         | I期    | 1段階        | 1段階        | (不明)      | 1    | I } II        | I    | (不明)      | IV段階<br>～<br>V段階 |                   |                           |  |     |     |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           | 2古   |               |      |           |                  |                   |                           | III  | I   | II  | III | IV | V |
|      |           |                            |       |            |            |           | 2新   |               |      |           |                  |                   |                           |  |     |     |     |    |   |
| 中葉   | 2期        | 2期                         | II期   | 2段階        | 2段階        | II        | 3古   | III           | I    | II        | VII段階            | 吉ヶ谷式土器<br>の流入     | 佐久系弥生土<br>器と吉ヶ谷式<br>土器の流入 |  |     |     |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           | 3新   |               |      |           |                  |                   |                           | IV   | V   | VI  |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           | 4    |               |      |           |                  |                   |                           |  |     |     |     |    |   |
| 後葉   | 3期        | 3期                         | III期古 | 3段階        | 3段階        | III新      | 5    | IV            | II   | III       | VIII段階           |                   | 十王台式土器<br>の流入<br>(西一本柳)   |  |     |     |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           |      |               |      |           |                  |                   |                           | 1段階  | 2段階 | 3段階 |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           |      |               |      |           |                  |                   |                           |  |     |     |     |    |   |
| 古墳前期 | 4期        | 4期                         | I期古   | 北平<br>4期   | 3段階        | V         |      | VI            | IV   | V         | IX段階             | 吉ヶ谷式土器<br>の流入     |                           |  |     |     |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           |      |               |      |           |                  |                   |                           | 1(青木一男)<br>9(青木一男)<br>0(青木一男)<br>0(青木一男)<br>8(青木一男)<br>1(青木一男) |     |     |     |    |   |
|      |           |                            |       |            |            |           |      |               |      |           |                  |                   |                           |  |     |     |     |    |   |

群馬県 群馬式 吉田・箱清水式 橋原式 座光寺・中島式

表1 本論の時間軸 土器編年表 (長野県各地と樽式土器を対比)

極の中間様式「橋原式土器様式」が分布する地域が加わる。

### (1) 弥生時代後期前葉≡樽式 1 期 (図 2)

長野県の後期前葉の土器様相は、今まで不明確であった松本・佐久地域の様相が資料増加により徐々に明らかになりつつある。

長野県北東部の千曲川流域では、上流域の佐久盆地と下流域の長野盆地には当該期の土器があるが、中流域の上田盆地では未確認である。上田盆地では、中期後半栗林期の土器もほとんどなく、集落跡が発見されていない。この状況は後期前葉まで続き、集落の造営が始まるのは後期中葉以降である。

長野盆地の後期前葉の土器は、長野市吉田高校グランド遺跡<sup>(4)</sup>に良好な資料があり、「吉田式土器」と呼ばれる。壺は頸部への文様の集約、縄文の払拭、栗林式的なへう描文と櫛描文の併用に加え、新たに鋭利な金属状工具で刻んだへう描文の登場に象徴される。鉄製品の普及と関連があると考え。文様が多用途、鋸歯文もこの時期の特徴的な文様である。

甕は口縁部が栗林式よりも長く伸び、口縁部端には施文するがその下は無文のことが多い。頸部には簾状文が一般的で、その下位の胴部には、波状文か斜状文、横羽状文が施されている。

佐久盆地では西一本柳遺跡<sup>(5)</sup>に当該期の良好な資料がある。壺の文様は、頸部に櫛描波状文、その下位に波状文を施す文様構成が特に目立つ。この文様構成は、群馬県高崎市情報団地Ⅰ遺跡<sup>(6)</sup>や埼玉県熊谷市前中西遺跡Ⅲ<sup>(7)</sup>出土の壺と類似している(図 21)。佐久盆地の後期弥生土器は、後期の始まりの時期には、北信長野盆地よりも峠を越えた群馬県・埼玉県など関東との共通性が強い。

なお、佐久盆地で矢羽状文はこの次の段階から発達し、後期中葉に至ると壺を飾る主文様としての地位を確立する。

長野県の中南部飯田盆地～松本盆地にかけては、壺・甕に櫛描文を何段も施文する「多段帯状施紋系土器」<sup>(8)</sup>が分布する。飯田盆地は恒川遺跡<sup>(9)</sup>、松

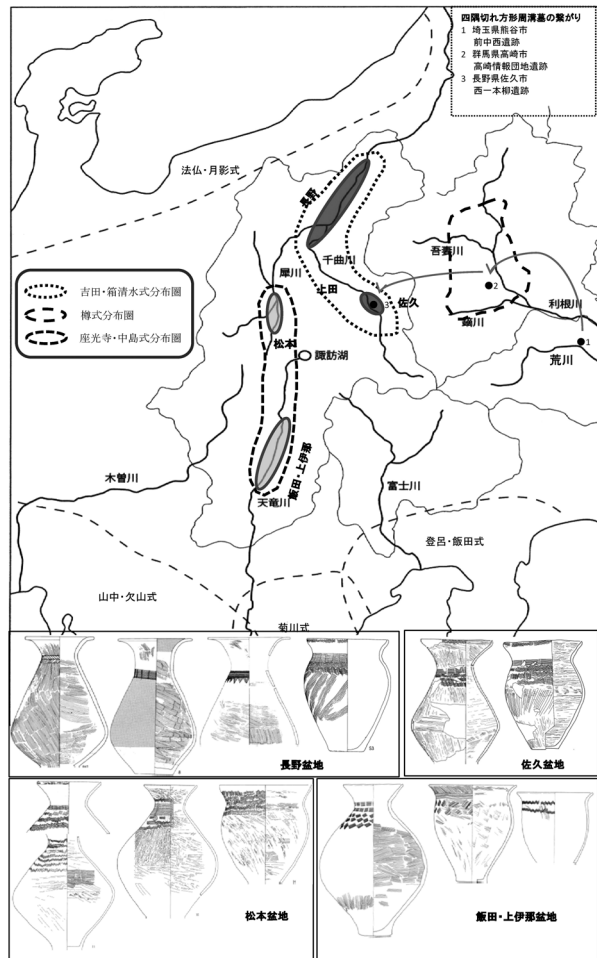


図 2 長野県後期弥生土器の地域色 (後期前葉≡樽 1 期)

本盆地は竹渕・鍬形原遺跡<sup>(10)</sup> 出土資料を掲示した。多段帯状施紋系土器は、飯田盆地で弥生中期後半に発達した北原式土器の文様構成を継承した土器であり、その遡源は愛知県三河、太平洋側地域の「長床式土器」などに求められるのではないかと考える。

中期後半に日本海側の弥生土器の影響を受けて成立した栗林式土器の主たる分布圏にあった松本盆地は、後期に至ると太平洋側起源の多段帯状施紋系土器という土器様式に転換する。弥生時代の中央高地で南北それぞれの地域の土器様式の間で、松本盆地をめぐるせめぎ合いがあったような現象である。

後期前葉には塩尻市柴宮銅鐸、松本市宮渕本村銅鐸など濃尾地方で生産された三遠式銅鐸が出土しているが、三遠式銅鐸の到来も太平洋側由来の土器様式の進出が無関係でないとする。

## (2) 弥生時代後期中葉≡樽式2期 (図3)

弥生時代後期中葉は長野県内各地で土器様相に地域的な個性が表出する。

長野盆地では、中葉でも新しい段階(青木一男4段階)<sup>(11)</sup>に壺は胴部の下半が屈曲する象徴的な器形の出現、赤く彩る壺が多くなること、頸部に櫛描のみによるT字文を施すようになること、甕は櫛描波状文を施すという「箱清水式土器」の基本形が確立される。甕も器形の統一と櫛描波状文への統一が図られる。

一方、佐久盆地では後期中葉(小山Ⅲ期新)<sup>(12)</sup>には胴部下半の屈曲、多くの壺を赤く塗るという点では長野盆地と同様で箱清水土器様式圏の範疇にありながらも、壺が櫛描T字文に統一されずへら描矢羽状文が併用されるという地域色が発生する。また、少数派ではあるが頸部に簾状文、その下に波状文という樽式の壺に用いられる文様構成の壺もあり、群馬県に近い佐久盆地の地域性を示している。

甕も櫛描波状文のみでなく、櫛描横羽状文も併用して地域の独自色をもつ。壺・甕の文様に看られる佐久盆地独自の地域色は古墳時代初頭にまで継承さ

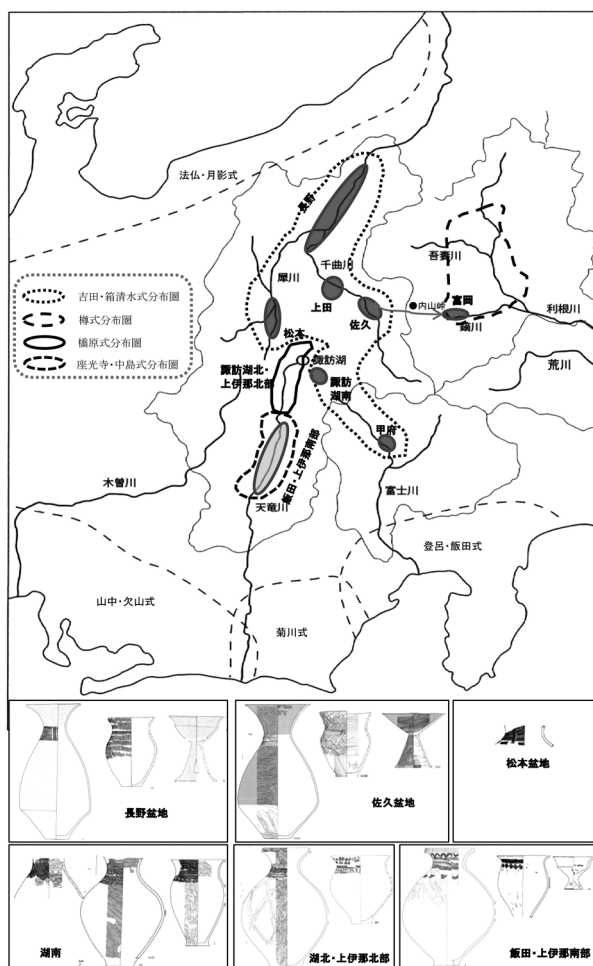


図3 長野県後期弥生土器の地域色(後期中葉≡樽式2期)



れていく。

後期中葉に至ってこれまで未開拓地であった上田盆地でも、ようやく集落の形成が始まる。吉田・箱清水式土器様式圏内にあり、土器様相はおおむね長野盆地と連動する。

松本盆地では、後期中葉前半には前葉に進出を果たした多段帯状施紋系土器が継続して主体を占める。後半は資料が不足しているが、T字文が施される壺が見られるなど箱清水式土器への転換が始まったようである。

後期中葉後半には吉田・箱清水式土器様式が飯田盆地由来の座光寺・中島式土器様式から失地を奪い返したような状況を示しているようにも見える。以後、松本盆地は古墳時代到来まで、吉田・箱清水式土器様式圏に留まる。

諏訪湖南部の茅野市を中心とする地域は、後期前葉の様相はやや不明瞭で、本格的な集落形成は後期中葉からと考えられる。茅野市家下遺跡では、佐久盆地の影響と考えられる鋭利な工具によるヘラ描矢羽状文などが出土する。これに東海東部地域系と考えられる折り返し口縁を採用する壺なども加わり、千曲川上流域の要素を基本としつつも、東海東部系の要素も混在する<sup>(13)</sup>。このような土器様相は茅野市と南東方向に近接する甲府盆地から出土する「金の尾式土器」とも共通要素が多く認められる。

諏訪盆北部～上伊那北部の岡谷市、辰野町、箕輪町などの天竜川沿いの後期前葉の土器様相は、多段帯状施紋系土器が主体の地域である。

後期中葉後半になると系統的には座光寺・中島式土器の諸要素を引き継ぎながらも、長野県中部で独自の発展を遂げた「橋原式土器」が成立する。壺は座光寺・中島式土器固有の内折する受口口縁壺を採用し、受口口縁壺は後葉には外反度が強まる飯田盆地・上伊那南部とは異なり外反度はむしろ弱まって独自の発展を遂げる。多段帯状施文系土器の壺が多くみられるのもこの段階の特徴である。甕はこの段階は非断絶の帯を意識した「畿内型櫛描文」を採用しているが、半数は「中部高地型櫛描文」も共存する。この点が折衷様式といわれるゆえんの一つである。これが後葉へと新しくなるにつれて、9：4、7：1と「中部高地型櫛描文」が増加する。甕は口縁部が長く外反するタイプが採用され、飯田・上伊那南部とは異なった様相を強める<sup>(14)</sup>。

多段帯状施紋系土器の誕生地と考えられる地域である飯田盆地～上伊那南部では座光寺・中島式土器固有の受口口縁壺はこの時期に完成する。櫛描斜行単線文に象徴される甕は、諏訪湖北部・上伊那南部に比して短く外反する甕が主体的である<sup>(15)</sup>。

### (3) 弥生時代後期後葉≡樽式3期(図4)

長野盆地では、後期後葉に至ると壺の球胴化が始まり、櫛描T字文の縦位区画が1本単位から2本単位に変化する。甕も胴部の張りが強まるのに連動して頸部の屈曲点が明瞭な甕(図4中長野盆地の甕)があらわれる。この甕は佐久盆地や上田盆地にはない。

佐久盆地では、壺・甕共に球胴化への方向性は長野盆地と同様であるが、頸部は弓状に外反するものがほとんどで、屈曲点が明瞭な甕は見られない。文様については、佐久盆地特有の壺

のヘラ描矢羽状文、甕の櫛描横羽状文が少数派であるが継続している。

後期後葉の松本盆地では、櫛描T字文の縦区画が2本単位の壺が見られる。また、櫛描T字文に座光寺・中島式土器の円弧文が融合したJ字文を持つ壺が地域独自に創出される。甕は球胴化傾向にあり、中部高地型櫛描文を施文している。以上から後期後葉の松本盆地はおおむね吉田・箱清水式土器様式圏内に収まり、若干座光寺・中島式土器養様式圏の影響も被っているとみてよい。

この時期に在地の弥生土器とともに、尾張を中心として畿内、近江、北陸、東海東部、南関東などの広域の外來系土器が多く出土する塩尻市上木戸遺跡<sup>(16)</sup>が長野県ではいち早く出現する。こののち、松本盆地では古墳時代初頭に至って長野県最大の前方後方墳弘法山古墳の築造に至るが、上木戸遺跡はその前進基地的集落であった可能性が指摘されている。

諏訪湖南部は後期後葉の出土資料が少なく、小池岳史も認めるように型式内容が不明瞭である。諏訪湖北部から上伊那北部は、「橋原式」の受口口縁壺と松本盆地と同様のJ字文を採用する壺が共存する。多段帯状施文系の壺は消滅していく。甕は球胴化し、畿内型櫛描文と中部高地型櫛描文が共存する。この段階は、前述のように高林重水の土器分析でも中部高地型櫛描文の比率が増えることが指摘されており、総体的に吉田・箱清水式土器様式の進出が著しい段階と言える。なお、従来諏訪盆地で後期前半の土器とされてきた桐原健が型式設定した岡谷市岡屋遺跡5住出土の「岡屋式(おかのやしき)土器」<sup>(17)</sup>は、壺の球胴化が顕著で、有段口縁も外からの影響が強いと思われる。甕も器高に対して口縁部・胴部の幅が広がっている。以上の属性は吉田・箱清水式土器様式圏の弥生時代後期後葉～古墳時代前期の特徴と考える。よって「岡屋式」は後期後葉以降に位置づけたい。

飯田盆地から上伊那南部地域については、受口口縁壺口縁部の外反度が強まるにつれ、内折して立ち上がるものが直立するようになる。甕は短く扁平に屈曲するものにほぼ統一される。高

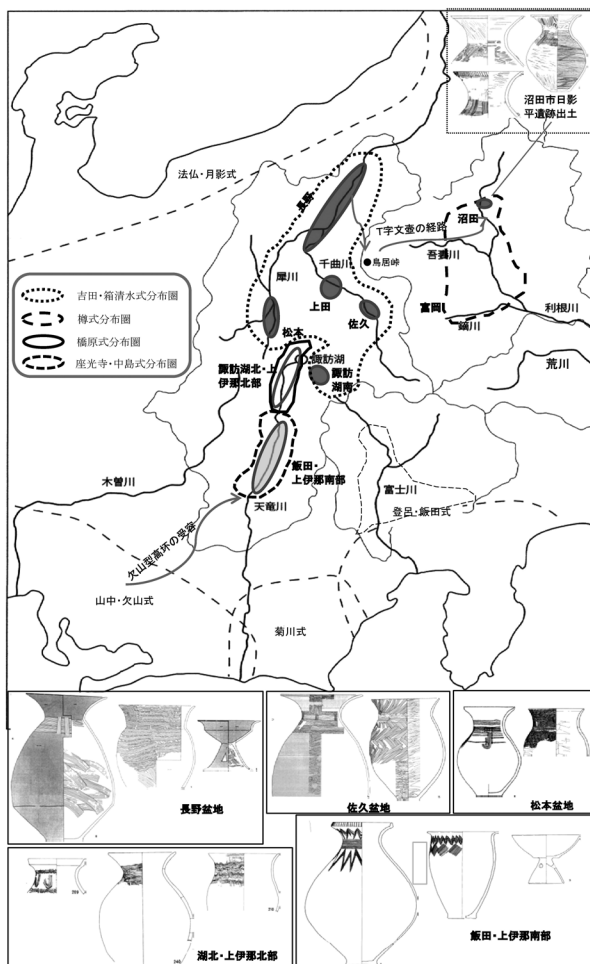


図4 長野県後期弥生土器の地域色（後期後葉≡樽3期）

坏は、座光寺・中島式固有の高坏は創出されず、東海西部の「欠山型高坏」を補完する。飯田盆地周辺は、弥生時代後期を通じて吉田・箱清水式土器様式の進出を阻み、固有性を保守した地域と言える。

### 3. 箱清水と樽の比較（図5）

弥生時代後期に至って違いがはっきりとしてくる樽式2期と中葉の箱清水式土器を比較してみる。まず、若狭徹の表現<sup>(18)</sup>を引用する。「壺の口の部分では箱清水式はぐっと大きく開きますが、樽式はすっと立つ。箱清水式の胴は下が屈曲するが、樽式は屈曲しない。」このほか、形態は箱清水の壺・甕は単口縁が主であるが、樽の壺・甕は複合口縁が多くみられる。甕の文様は、箱清水は口縁から胴部まで文様を埋めるのに対し、樽は口縁部無文が多いなどの違いもある。赤色塗彩の傾向は、大木紳一郎がまとめている<sup>(19)</sup>。壺・高坏・鉢など土器の器面を赤く彩る割合は箱清水式は壺の5割以上、樽式は2割程度、高坏・鉢は箱清水式がそれぞれ8～9割と6～7割であるのに対し、樽式は5～7割と2～3割ということである。箱清水式の方が圧倒的に赤色塗彩率が高いことがわかる。

箱清水式が日常容器を赤く塗ることにこだわった理由は分かっていないが、弥生時代後期に千曲川流域の土器を作る人々が一堂に会して、土器を赤く塗ることを学習する機会があった可能性は高い。

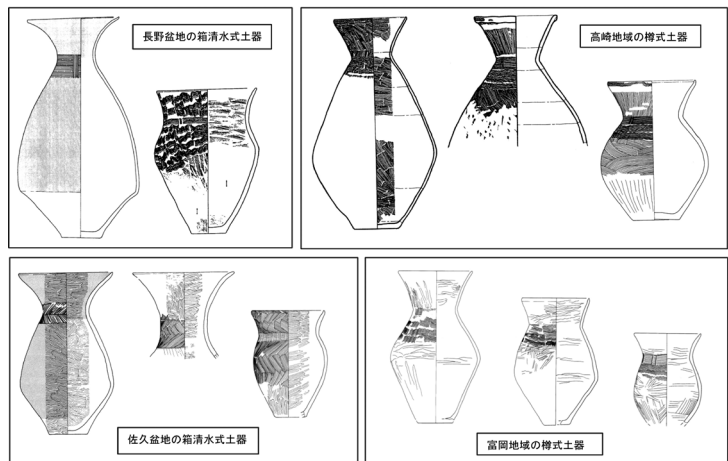


図5 箱清水と樽の比較（青木1998、和久他1983、上田2013、大木1997から転載）

### 4. 長野県各地の弥生後期集落の盛衰

#### （1）佐久盆地の動き（図6～9）

図6・7は佐久盆地の弥生後期中葉～後葉と古墳前期の集落の分布状況である<sup>(20)</sup>。弥生時代後期中葉～後葉と古墳時代前期では極端に分布状況が異なることがわかる。弥生時代後期中葉～後葉の遺跡は盆地平坦部に分布している。特に浅間山の麓から千曲川へ流れ下る湯川右岸沿いから西の地域に集中している。一方、古墳時代前期になると平野部だけでなく、山際にも遺跡が広がっている状況が見て取れる。

弥生時代後期中葉（Ⅲ期古）には周防畑遺跡群において大きな集落の形成が始まる。この段階の集落はまだ、1か所確認されている程度であるが、その次の中葉でも新しい段階（Ⅲ期新）になると西近津、宮の前、長土呂、上直路、円正坊、上木戸、柳堂など大小規模の集落が犇





図 6 佐久盆地の弥生後期後半遺跡分布図

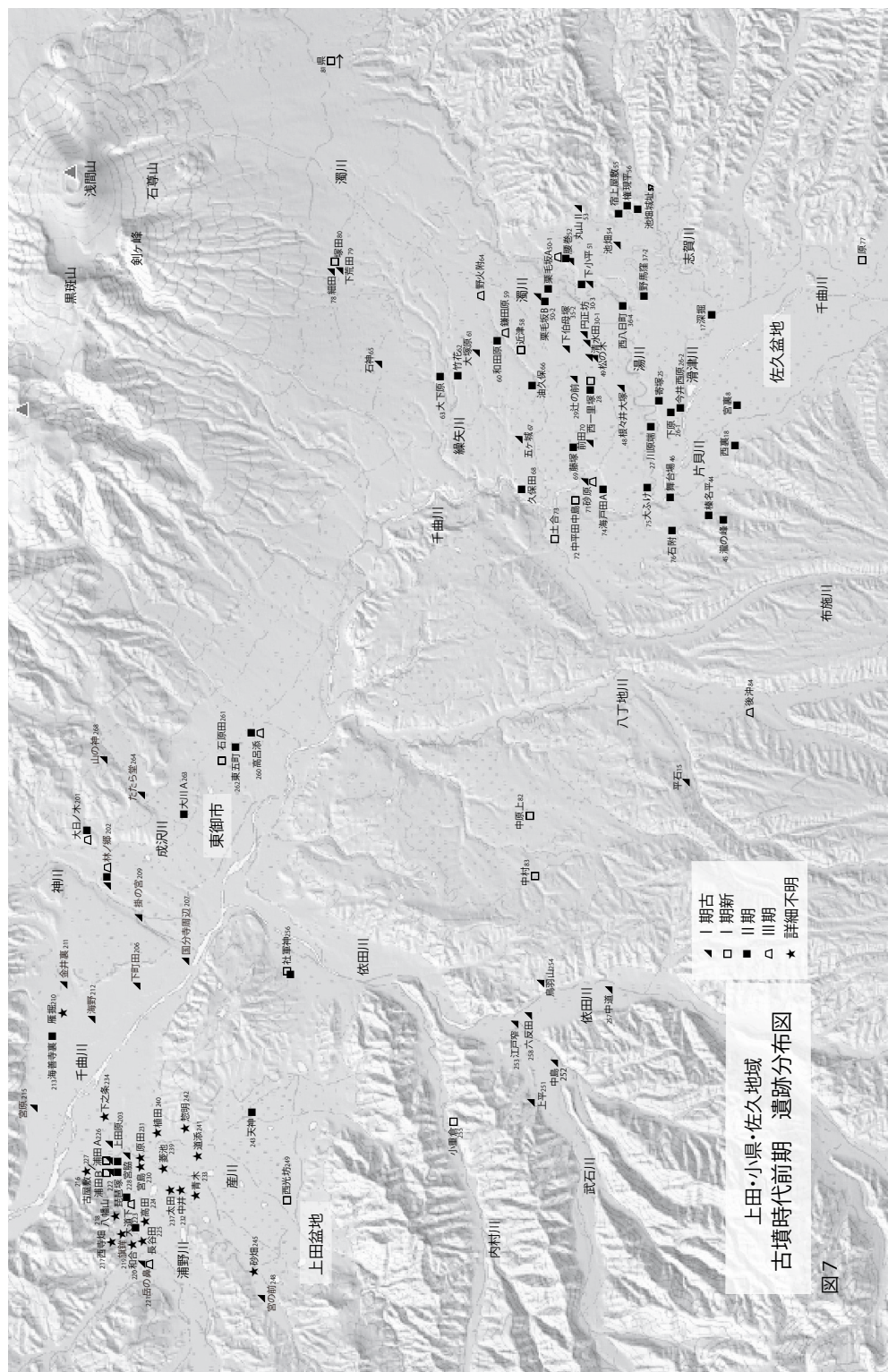


図7 佐久盆地の古墳前期遺跡分布図





図8 佐久平の弥生後期後半遺跡分布（南から俯瞰）



図9 佐久平の古墳前期遺跡分布（南から俯瞰）

めき合うように東西に方向に展開する状況になる。特に西近津遺跡では、この時期の竪穴住居120軒以上が見つかっており、1時期50軒以上の大きな集落が営まれた。佐久盆地の弥生時代後期で西近津遺跡の集落を頂点として最も集落数が多く、集落規模も大きくなった時期が後期中～後葉（Ⅲ期新）である。

後葉になると佐久盆地の集落は、佐久市西一本柳・北一本柳両遺跡で幅250～370mに及ぶ巨大な環壕集落が営まれる半面で、前代よりも集落数が減少する傾向もみられる。

これが古墳時代前期になると遺跡数は増えるが、大きな集落はほとんどなくなり最大でも1時

期 20 軒程度、大概是 10 軒前後、中には 1～2 軒のごく小さい集落も多数見られるようになる。高所に位置する遺跡は軽井沢町県遺跡 935 m、御代田町細田・下荒田・塚田遺跡 810・824・817 m、小諸市石神遺跡 795 m、佐久市丸山Ⅱ遺跡 810 mなどで軽井沢町などは気候温暖化の現在でも冷涼な地域である。このほかにも標高は高くないが、小諸市周辺部、佐久市中部、佐久市北東部など弥生時代後期に集落が営まれなかった地域にも集落が営まれるようになる。

## (2) 長野県各地域の動き

弥生時代後期前葉は、長野・佐久・松本・飯田各盆地で確認されているが、その数は少なく、規模も大規模なものは、認められない。

中葉は佐久平に限らず県内一様に集落数が増大し、規模も拡大する時期と言える。その中で後期後葉にはさらに大きな発展をしていくのが、長野盆地、上田盆地、飯田盆地の3地域であり、逆に後期中葉をピークとして後葉には縮小していくのが佐久盆地、諏訪湖北部、諏訪湖南部である。松本盆地は様相が今一つ不明確であるが、前者に属すると考える。

後葉に至ると、長野盆地の南部、篠ノ井、塩崎遺跡群などで古墳時代に近づくほど集落規模・数が大きくなっていく傾向が看取される。この状況は飯田盆地や上田盆地も同様である。佐久盆地は集落数が減少する半面、大規模な環濠集落が形成される。

諏訪湖南部は中葉では茅野市家下遺跡が中核的集落で、その近くには同時期と考えられる阿弥陀堂・構井・一本榎など集落が近隣に集まるが、後葉に至ると大きな集落が未確認である。諏訪湖北部～上伊那北部は岡谷市橋原遺跡を起点として、志平・後田原・樋口内城など後期中葉後半と考えられる集落が天竜川沿いに展開する。この中でも橋原遺跡、辰野町樋口内城遺跡は、中核的な集落である。しかし、後期後葉になると橋原遺跡、辰野町樋口五反田遺跡以外に目立った集落が見られなくなる。高林重水は後期中葉（橋原Ⅰ期）の竪穴住居数が最も多く、後葉（橋原Ⅱ・Ⅲ期）～古墳時代前期（橋原Ⅳ期）には徐々に竪穴住居数が減っていくことを指摘している<sup>(21)</sup>。橋原遺跡の状況は弥生時代後期中葉以降の諏訪湖北部から上伊那北部全体の動向を反映していると考える。

後期後葉の松本盆地は 1800 m<sup>2</sup>の調査面積で

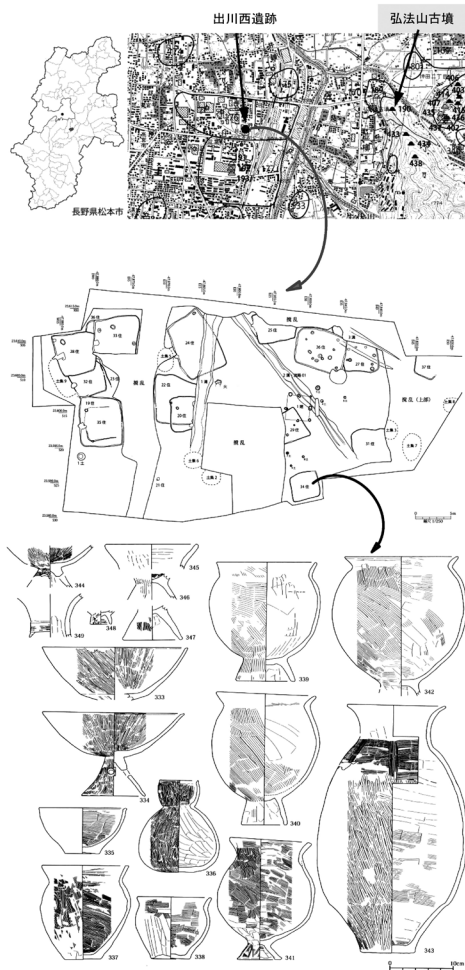


図 10 松本市出川西遺跡（直井 2015 から転載）

40軒の竪穴住居址が密集して発掘された塩尻市田川端遺跡<sup>(22)</sup>は大きな集落であったことが想定されるほか、上木戸遺跡のような東海地方をはじめ、近江、南関東など広域な外来系土器が集まる先進的な集落も認められる。直井雅尚から、松本盆地内でも後葉の大規模集落の存在の可能性は高いとの教示を得たので、松本盆地も後期後葉には、集落数・規模が増えていく地域に含めて良いと考える。弘法山古墳築造の前提条件である地域内における生産力の拡大は、弥生時代後期後葉に始まっていたようである。

続いて古墳時代前期には弘法山古墳の眼下、現在でも湧水の激しい低地部に接する出川西遺跡<sup>(23)</sup>で東海地方の集団が移住したと考えられる集落が営まれる(図10)。遺跡の一带は弥生時代中期にいったん集落が形成されるが、弥生時代後期に至ると遺跡がなく、開発が放棄されたようである。そして古墳時代に入ってから再びこの低地部の開発が開始される。出川西遺跡のような移住集団の集落は、弘法山古墳周辺の低地にいくつかあったと考えられる。

スケールの違いはあるが、弥生時代には手つかずの低地部に目をつけた東海地方の石田川式集団が、群馬県南～東部の平野部新田太田地域や邑楽館林地域の開発に乗り出していった状況に相似する。

以上、弥生時代後期中葉後半を分岐点として後葉には集落数や規模が拡大していく地域は、長野・上田・飯田そして松本盆地、逆に数か規模が縮小していく地域は、佐久・諏訪盆地～上伊那地域である。両者の大きな違いは標高である。前者の長野は350m、上田は500m、飯田は400～550m、松本は500m、後者の佐久は700m、諏訪は諏訪湖の湖床が759mで諏訪湖北部・南部の遺跡は759m以上、上伊那の辰野町で710m、南箕輪村で700m、弥生時代後期後葉に至って集落数か規模が減少していく地域はいずれも700m以上の標高が高い地域という傾向が見られる。

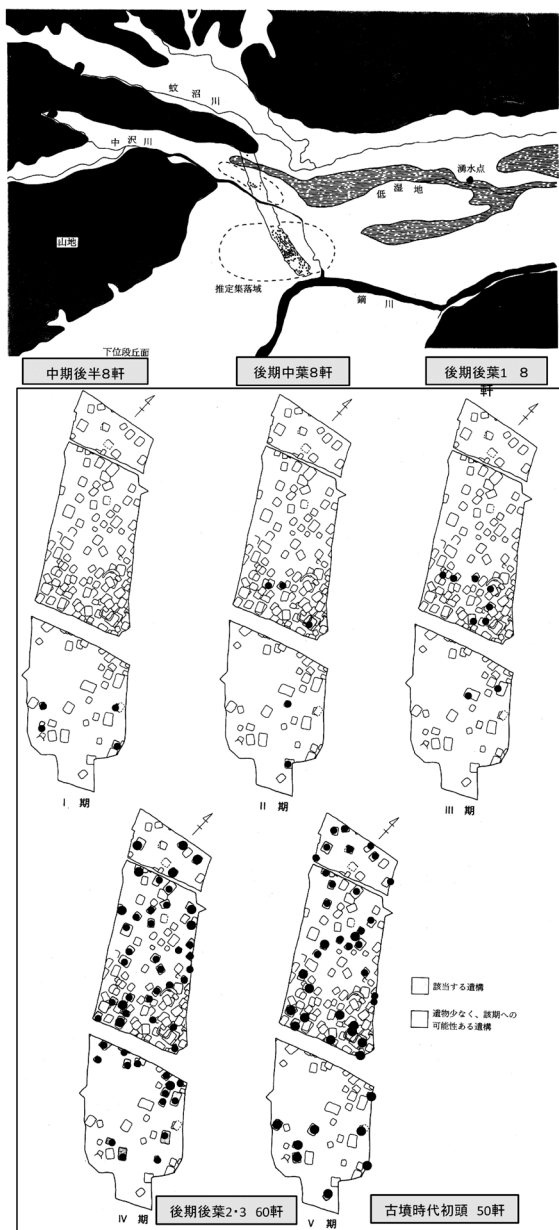


図11 富岡市南蛇井増光寺集落の展開(大木1997から転載)



弥生時代中期は温暖期でこれに比較すると弥生時代後期～古墳時代は何度かの繰り返しを繰り返しながらも寒冷化に傾斜していった時代であると言われている<sup>(24)</sup>。標高 700 m を越える佐久・諏訪盆地～上伊那地域の後期後葉における集落数や規模の縮小現象は、寒冷化も左右した可能性がある。

さらに付け加えると標高 700 m を超える長野県の諸地域は、後の古墳時代に前方後円墳・前方後方墳などの大型古墳の築造に至らなかった地域でもある。

佐久盆地における古墳時代前期の遺跡の小規模化と盆地平坦部から山間地などへの拡散現象は、スリムになって分散居住して生き残りを図るという寒冷化への対抗手段であったと考える。もちろん、高い所の開拓には古墳時代前期に東海地方等西方から新たにもたらされた灌漑技術等が後押ししたと考えてよいと思われる。

群馬県ではどうか。大木紳一郎が分析した南蛇井増光寺遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の集落は、後期でも古墳時代に近づくほど、堅穴住居数が増えていくことが確認できる<sup>(25)</sup>（図 11）。

群馬県の弥生後期集落でも屈指の規模を持つ高崎市新保遺跡の後期集落も時期が新しくなるにつれ堅穴住居数が増大し報告書で 3 期とする時期には 32 軒にもなる。古墳時代前期においても弥生後期 3 期よりも堅穴住居の数は若干減るが、過密状況を保っている<sup>(26)</sup>。

樽式では後期の中でも時間が進むほど規模を増大していく地域が多そうということが出来る。

弥生時代を通じてあまり手がつかなかった群馬県南部～東部の平野部の古墳時代前期の状況については、前橋市荒砥前田Ⅱ遺跡の調査報告での小島敦子の分析が参考になる<sup>(27)</sup>。小島は前橋市荒砥地域では弥生後期遺跡が 5 遺跡に対し古墳前期の遺跡は 60 遺跡に激増し、荒砥地域のほぼ全域に集落の分布が及んでいることを指摘する。平野部の開拓を推し進めた石田川式集団の集落がそれまでの空白地帯を一挙に埋めていった状況が彷彿とされる。

今回、群馬県の弥生～古墳時代前期集落の盛衰については、ごく一部のサンプルを抽出した予想にすぎない。今後、長野県と同様にすべての資料を当たって分析をしたい。

## 5. 食糧生産址とメジャーフード（図 12）

佐久盆地では弥生時代の水田址はみつかっていない。参考になるのは佐久市濁り遺跡<sup>(28)</sup>の平安時代水田址で、自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田である。おそらくは、これとさして変わらない水田が弥生時代集落の近隣で経営されていたものと思われる。

佐久の弥生人のメジャーフードについては、最近遠藤英子が周防畑遺跡群大豆田遺跡の弥生後期土器の

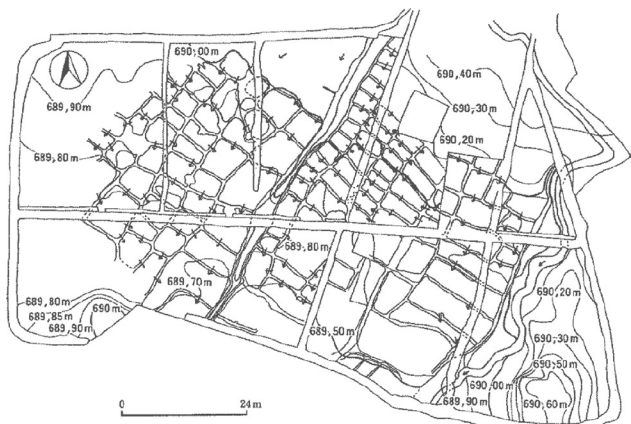


図 12 佐久市濁り遺跡の平安時代水田址（林 1996 から転載）

蓋の種実痕を分析することによって食糧の一端を明らかにした<sup>(29)</sup>。コメが一割、アワ・キビの雑穀が九割という結果であった。調査は一例だけであるため、常態を示すデータとは言い切れないが、弥生時代の佐久盆地ではコメとともに雑穀も合わせて積極的に栽培していた可能性が高まった。第2次世界大戦前の佐久盆地では、冷害対策としてコメとともに雑穀栽培も積極的に行っていた。戦前の人々の知恵は、弥生時代から継承されたものであったのかもしれない。

## 6. 文物の往来

弥生時代後期後葉＝樽式3期になると古墳時代に先んじて各地の違った顔つきをもつ土器や鉄製品など様々な文物が、他地域から吉田・箱清水、樽式土器様式圏にもたらされ始めている。

### (1) 土器

#### ①長野盆地と北陸との交流 (図13)

長野盆地・上田盆地には弥生時代後期に北陸系土器がもたらされる。田嶋明人は、北信濃・長野盆地周辺では弥生時代後期中葉（青木4段階）から古墳時代前期にかけて定量の北陸系土器が見られると言う<sup>(30)</sup>。まず後期中葉（青木4段階）は北陸北東部特に越後の型式的特徴をもつ北陸系土器が認められ、近接地域間交流が主であり、より遠隔地との交流が始まった可能性も示唆する。次の後期後葉（青木5段階）になると越後からもたらされた土器とともに、越中の土器も目立つようになり、より遠隔の地域との交流が明確化する。長野市長野女子高校校庭遺跡では後期後葉を主体とする竪穴住居址26軒中、11軒に北陸系土器が伴っており、越後と越中系統の土器が混在している<sup>(31)</sup>。これ以降の古墳時代前期も長野盆地は北陸との太いパイプを維持する。

北陸との関係が濃厚な長野盆地と比較すると、佐久盆地は弥生時代の段階での北陸系土器の流入が少なく、古墳時代前期に至って少量の北陸系土器が確認できる程度である。弥生時代後期後葉の佐久盆地は、北陸系土器の伝播ルート上にはのっていないかとみるのが妥当である。樽式の遺跡出土の北陸系土器は佐久盆地を経由しないで、長野盆地ルートで直接もたらされたと考えて良い。

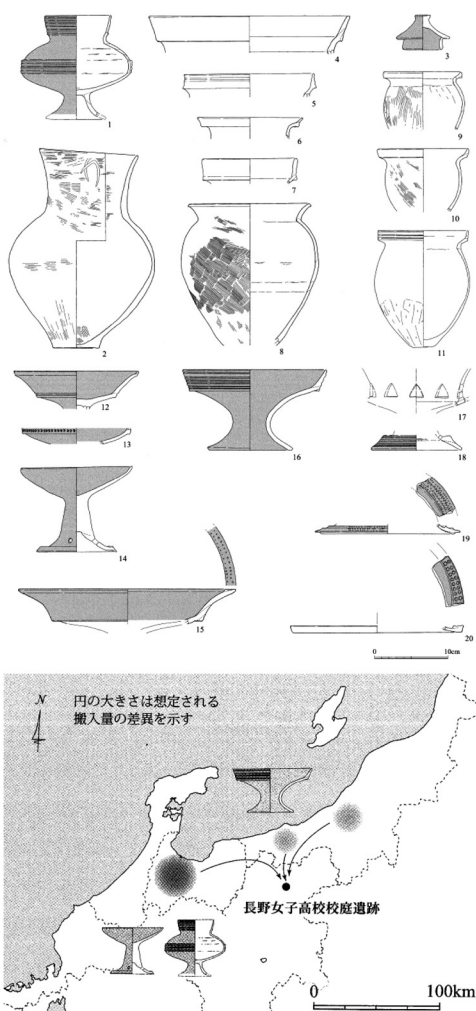


図13 長野市長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器（平林2013から転載）



## ②長野盆地と沼田地域との交流（図 14）

沼田地域では他の樽式土器の様式圏（甘楽・富岡、高崎、渋川など）に少ない樽式 3 期の壺の櫛描 T 字文が、町田小沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、日影平遺跡<sup>(32)</sup>などで樽式の壺の文様に融合した状態で出土する。

壺の T 字文については、千曲川流域の箱清水式土器には当たり前に施文される文様で千曲川流域のどこからもたらされてもおかしくはない。しかし、私は上田・佐久盆地からの伝播でなく、長野盆地から菅平から鳥居峠を經由して群馬県北部地域にもたらされたものという考えを強く持つ。その証拠は、町田小沢Ⅱ遺跡の 1 号住居址から出土した長野盆地に特徴的に存在して、上田・佐久盆地には存在しない頸部の屈曲点が明瞭な甕（以下、北信甕 図 14、図 4 長野盆地中の甕）の存在である。この甕は上田・佐久盆地からは出土しない。

沼田市で実物を観察したところ、1 号住居址の多数の甕を比較したところ北信甕だけが他の甕と胎土及び施文具が違っていることに気付いた。長野盆地からの搬入品である可能性が濃厚である。今後、胎土分析を実施して科学的に証明したいと考える。

## ③佐久盆地と富岡地域の交流（図 15）

佐久盆地の弥生時代後期は、佐久盆地と直線距離 21km の位置にある富岡地域との交流が濃厚である。

前に述べたように中葉後半～後葉前半（小山Ⅲ段階新）は後期を通じて佐久盆地で集落数が最も多く、西近津遺跡群に象徴されるように 1 時期 50 軒規模の集落が営まれるなど佐久盆地の後期弥生集落が最も膨張した時期でもある。この繁栄期に内山峠を越えて、東に直線距離

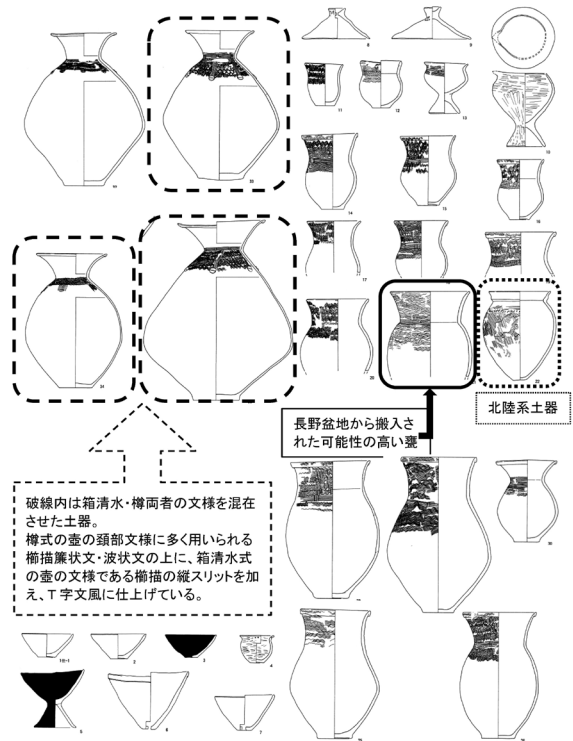


図 14 群馬県沼田市町田小沢Ⅱ遺跡 1 号住居址出土の弥生土器（小池雅典 1994 から転載）

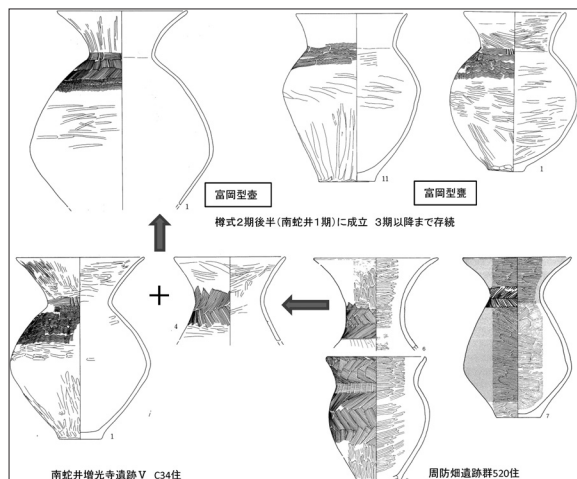


図 15 富岡型壺成立過程の予測

21 kmの群馬県富岡市の南蛇井増光寺遺跡へ佐久系の赤い壺や櫛描きの横羽状文を甕などが流入し、「富岡型壺」の成立（図 15）にも影響を与えている<sup>(33)</sup>。

大木紳一郎は、南蛇井増光寺遺跡の後期弥生土器を 1 期から 4 期に編年した。佐久系の箱清水式土器は、1～4 期すべての時期に少量だが継続的に存在しており、数量的な増減はあまりない。このことから佐久盆地で最も集落規模・数ともに増大した時期に佐久から富岡への土器の移動が始まり、古墳時代前期までは確実に直線距離 21km の隣接地域間の移動が継続していたことがわかる。逆に富岡から佐久への土器の移動は今のところ確認されていない。なぜ、一方的な移動であったのか、今後解明しなければならない課題である。

大木が提唱した「富岡型壺」については、図 15 に成立過程を想定した。「富岡型壺」成立前の後期中葉の前半（小山Ⅲ期古）の周防畑遺跡群出土壺の主文様には鋭利なヘラ描矢羽状文、櫛描のみの T 字文とともに櫛描横羽状文が存在する。大木は佐久の甕の横羽状文が樽式の壺の文様構成に取り込まれたものと見たが、ここでは、佐久の直前時期の壺の文様を取り込まれた可能性も提起しておきたい。

#### ④埼玉県との交流（図 16）

佐久盆地では、中葉前半（小山Ⅲ期古）には周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅳにおいて埼玉県の荒川中流域右岸地域（比企・入間地方）に分布する縄文を施す吉ヶ谷式土器がみついている<sup>(34)</sup>。長野県で吉ヶ谷式土器が見つかっているのは佐久盆地の周防畑遺跡群周辺だけで、地理的な要因の強さがうかがえる。柿沼幹夫によれば、大豆田遺跡Ⅳの土器は吉ヶ谷式土器でも最古型式に属するという。南蛇井増光寺遺跡Ⅴの報告段階では佐久盆地は群馬県富岡地域よりも 1 段階早く吉ヶ谷式土器を受容していた状況が見られたため、群馬県

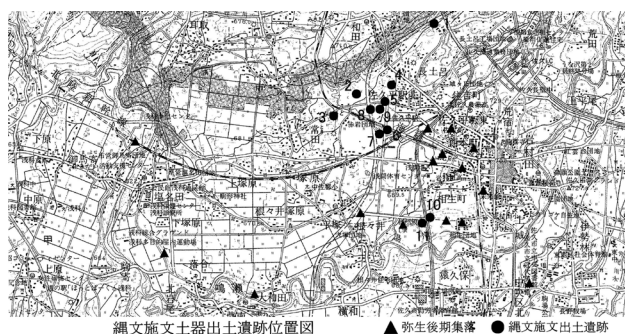


図 16 佐久盆地出土の吉ヶ谷式土器（富沢 2015 から転載）

を頭越しにした長野・埼玉間の直接交流の可能性もあった。しかし、2016 年 1 月 24 日のかみつけの里博物館特別展「ゆくものくるもの」連続講座発表資料で柿沼が、富岡市中高瀬観音山遺跡に吉ヶ谷式最古型式を見出したため、甘楽・富岡地域での最古の吉ヶ谷式の空白は解消した。このことによって弥生時代後期中葉＝樽式 2 期における比企・入間―甘楽・富岡―佐久地域における隣接地域間の連関の強さがみえてきた。

このうち、吉ヶ谷式土器はしばらくの空白において、この後の時代にも佐久盆地へ到来する(第 16 図―1・7・11～13)。その時期は古墳時代前期、柿沼が吉ヶ谷系と呼ぶ土器である。

#### ⑤ 佐久盆地と茨城県北部の交流 (図 17)

後期後葉(後期Ⅳ期)になると佐久盆地の西一本柳遺跡へ茨城の十王台式土器がもたらされている(第 22 図)。この土器は弥生時代後期後半の十王台式を三時期に分ければ、2 か 3 の時期すなわち弥生後期の終わりかそれに近づいたころに当たり、佐久盆地の編年と概ね整合が取れる<sup>(35)</sup>。

弥生後期後半の大規模集落甘楽町三ツ俣遺跡や富岡市南蛇井増光寺遺跡では、十王台式土器が出土しており、甘楽富岡地域の拠点集落へ訪れた十王台の人が、足を延ばして佐久の拠点集落に辿りついたとみることができる。

群馬県では、十王台式土器が 19 例見つかっているが、逆に茨城県で見つかっている樽式土器は 5 例に過ぎない。この現象は十王台式から樽式文化圏へ出向くことが多かったことを表している。鈴木素行は、弥生時代後期後葉＝樽式 3 期の長野県や群馬県の豊富な鉄製品の獲得を目指して十王台の人々が西へ移動した結果と見る。移動距離は現在の道程でも約 250km もある。

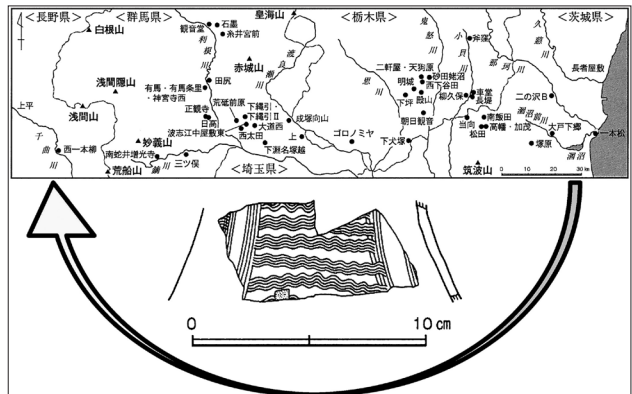


図 17 佐久市西一本柳遺跡出土の十王台式(鈴木 2011 から転載)

#### (2) 北(朝鮮半島含む)からもたらされたもの

##### ① 鉄剣・鉄釧・銅釧(図 18)

鉄剣・鉄釧・銅釧は長野県の北半分、吉田・箱清水式土器様式圏や樽式土器様式圏に分布し、飯田盆地を中心とする座光寺・中島式土器様式圏では飯田市滝沢井尻遺跡の方形周溝墓主体部出土の鉄剣 2 振り<sup>(36)</sup>があるに過ぎない。山下誠一は下伊

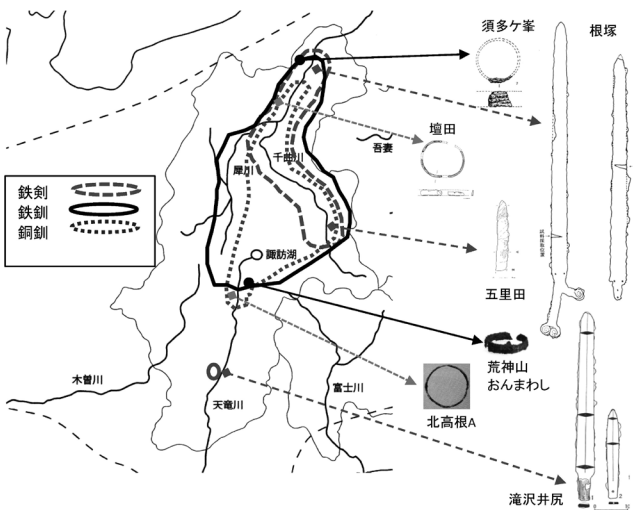


図 18 長野県域における鉄剣、鉄釧、銅釧の分布



那の方形周溝墓は通常副葬品や供献土器をほとんど持たないので、滝沢井尻の鉄剣についてはきわめて例外的な存在だと言う。そして長野県の北側に割拠する吉田・箱清水式土器様式圏の小地域の首長層が保持した鉄剣・鉄釧・銅釧は、長野県の南側に対峙する座光寺・中島土器様式圏の首長層には受け入れがたい装身具、威信財であったと解釈する。以上の見解から滝沢井尻の鉄剣は、葬られた首長が何らかの理由で吉田・箱清水式土器文化圏の首長と接触した結果所持することになったものと考えられる。

なお、長野県の鉄剣・鉄釧・銅釧は、弥生時代後期中葉～後葉にかけて集落の近くに造営された小地域の首長層の墓の副葬品として発見される例が多く、この点も群馬県と共通している。

**鉄剣** 飯田市滝沢井尻の鉄剣を例外的なものとして考えると、鉄剣の分布の北端は木島平村根塚遺跡、南端は佐久市五里田遺跡で、今のところ千曲川流域に限定的に分布する。根塚遺跡出土の柄に渦巻き装飾をもつ鉄剣<sup>(37)</sup>は、伽耶産の特注品と言われ全長74cmの大型品である。根塚以外は全長30cm前後の短剣で、茎部が短く刃間に双孔を持つものが多いのも特徴の一つである。私は飯田の滝沢井尻遺跡の鉄剣も双孔鉄剣である可能性が高いと考えている。

丹後の弥生時代後期の首長墓には鉄製武器が多く副葬され<sup>(38)</sup>、双孔鉄剣もその一つである。長野県へ至った経緯は丹後を無視することはできない。

**鉄釧** 長野県北半部では、帯金をらせん状に巻きつけて制作した通称らせん状鉄釧が出土する。北は飯山市須多ヶ峯遺跡<sup>(39)</sup>、南は辰野町荒神山おんまわし遺跡<sup>(40)</sup>、鉄剣と違って千曲川流域だけでなく、松本・塩尻・大町などの中信、さらにはおんまわし遺跡の南信など広い範囲から出土する。最近では佐久市西一里塚遺跡や後家山遺跡<sup>(41)</sup>など佐久盆地の小地域首長層の墓域でも発見例が増えている。丹後半島に類例はなく、製作地は明らかになっていないが、帯金さえ手に入れば長野県でも制作可能な製品である。

**銅釧** 形状は円環状上で継ぎ目のない直径6cmの鋳造品が多くみられる。分布の北端は長野市壇田遺跡、南端は南箕輪村北高根A遺跡で、主体的な分布域は千曲川流域であるが、諏訪湖南部の茅野市の家下遺跡や上伊那の北高根A遺跡など鉄釧と同様広い範囲から出土する。製作地は確定していないが、臼居直之は長野県産つまり地元産ではないかと推定する<sup>(42)</sup>。佐久市上直路遺跡、五里田遺跡、長野市本村東沖遺跡では、腕に銅釧が装着された状態で出土している。

鉄剣については製品が、鉄釧・銅釧については原材料が北陸など日本海方面から北陸系土器に伴って長野県千曲川流域の吉田・箱清水式土器様式圏へ招来された。そして若狭徹が想定するように菅平、鳥居峠を介して吾妻川ルートで群馬県渋川地域や高崎地域などの樽式土器様式圏一円にもたらされたものと考えられる<sup>(43)</sup>。さらに鉄釧・鉄剣は樽式土器様式圏から荒川沿いに南下して東京湾岸地域にもたらされた。土器様式の枠組みを超えて日本海側から太平洋側を縦貫する金属製品の伝播ルートが、すでに弥生時代後期後葉には出来上がっていた。長野県と群馬県は日本海と太平洋を仲介する内陸の中間点である。

一方、近年佐久盆地でも鉄剣・鉄釧・銅釧の出土例が増加した。佐久盆地では北陸系土器は

受容しなかったが、首長層の威信財の獲得には熱心だったようだ。威信財の入手先は、長野盆地であった可能性を考えると北陸系土器不在の状況が理解しやすい。佐久盆地の威信財は、東方の隣接地へももたらされた。樽式の範疇の甘楽町の鉄釧や吉ヶ谷式の分布範囲埼玉県東松山市観音寺遺跡4号方形周溝墓出土の鉄剣・銅釧<sup>(44)</sup>がその証左である。

### ⑥人形土器 (図19)

最近まで群馬県でしか出土例がなかった人形土器が佐久盆地の西一里塚遺跡から出土した。破片がバラバラになってあちこちに散らばっていたが、弥生後期中葉Ⅲ期新以降の墓域の周囲から出土していることから、群馬の有馬遺跡や小八木志志貝戸遺跡と同じく墓場で用いられたものと考えられる。櫻井秀雄は、葬送儀礼の際の辟邪（邪悪を避ける行為）に用いられたものとする<sup>(45)</sup>。

人形土器出土遺跡のうち有馬遺跡と西一里塚遺跡では、鉄剣・鉄釧も見つかっている。深澤克仁は人形土器が鉄剣・鉄釧・銅釧と一体となって伝播していった可能性を指摘している<sup>(46)</sup>。

## (3) 南 (南関東) からもたらされたもの

### ①五平柱 (図20)

五平柱 (ごひらはしら)、柱材の建築用語で断面長方形の柱材のことを言う。この柱が弥生時代の竪穴住居に用いられていたことが、山梨県笛吹市境沢遺跡などで確認された。境沢遺跡は河川扇状地にあり、地下水位が高いため柱材が腐食せずに残っていた。

森泉かよ子は、佐久市北一本柳遺跡の調査で佐久盆地の弥生後期中葉の後半以降の竪穴住居でも五平柱が使用されていたことを突き

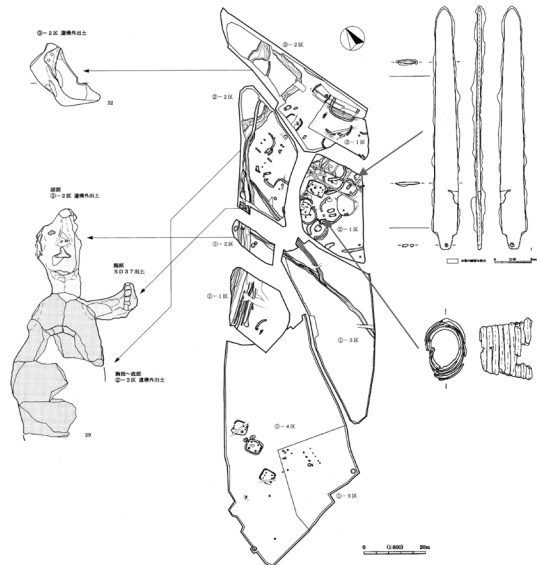


図19 西一里塚遺跡の人形土器と鉄剣・鉄釧出土状況 (櫻井 2012 から転載)

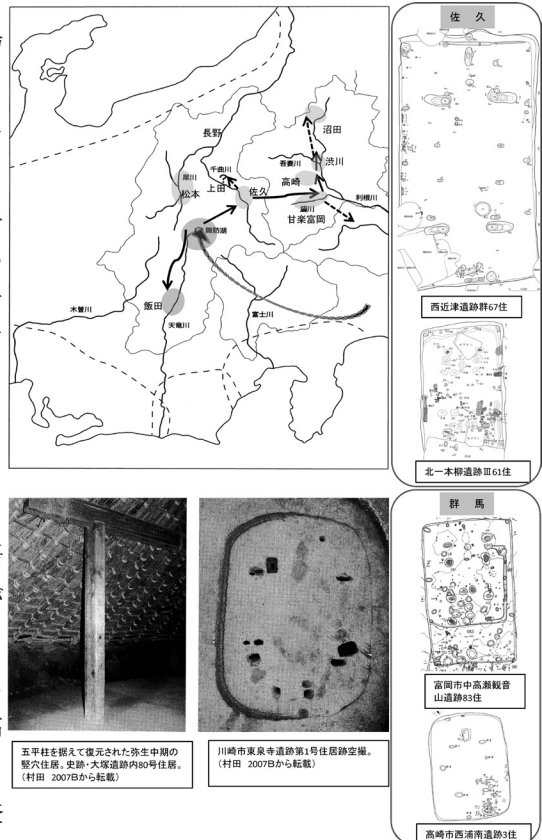


図20 五平柱の波及ルート (住居址平面図は柳沢 2015、森泉 2010、坂井 1988、若狭 1988 から転載)



止めた<sup>(47)</sup>。北一本柳遺跡の焼失した竪穴住居からみつかった主柱は炭化して長方形の形で残っていた。

これらの竪穴住居の主柱穴に共通するのは、柱穴底面の形状が超楕円形、超長方形を呈することである。これを基準にして類例を集めた村田文夫は東京・千葉・神奈川・山梨・長野・群馬・埼玉の1都6県、中部高地型櫛描文を施文する土器の分布圏に多いこと、最古例は南関東の弥生時代中期後半宮の台式にあることを指摘した<sup>(48)</sup>。

五平柱を作るためには、斧・鑿・鉋などの鉄製工具が必要であり、神奈川県砂田台遺跡の鉄剣を分断した鉄斧<sup>(49)</sup>にみられるように南関東において鉄が早く受容されたことと関連していると考ええる。

佐久盆地では後期中葉後半から後期後葉までの竪穴住居に五平柱が多用される傾向が見られ、佐久市西近津遺跡で発掘された長さ18.1 m、床面積155 m<sup>2</sup>という日本最大級の竪穴住居でも五平柱が使用されていたと考えられる。

柳沢亮は、五平柱の波及について、南関東を端緒として山梨県と諏訪盆地、次に佐久盆地、群馬県の順で波及したとみる<sup>(50)</sup>。

茅野市家下遺跡では中期後半栗林式の竪穴住居に五平柱が用いられている<sup>(51)</sup>。長野県で最も早い五平柱の受容である。諏訪盆地から佐久盆地への波及は時間がかかり、後期も後半になってから五平柱が採用される。五平柱は、さらに内山・碓氷峠、日影街道などを超えて群馬県へも伝播する。樽式の小地域「甘楽・富岡」「高崎」「渋川」「沼田」地域つまり、樽式の分布圏のほぼ全域に五平柱が波及しているとみてよく、埼玉県では、美里町羽黒山遺跡8号住居址など「美里・本庄地域」の樽式の外縁部に五平柱が存在する。吉ヶ谷式土器が分布する比企・人間地域については、今後存否の確認作業を行いたい。

一方、五平柱は長野県千曲川流域でも中上流域の上田・長野盆地では未発見である。今後の調査成果に注意を払っていかなければならない。

なお、村田は、天竜川沿いの長野県南部飯田盆地にも丹保遺跡に五平柱が存在するとみる。報告書では主柱穴の底面で明瞭な長方形、長楕円形が認められなかったので、山下誠一に確認したところ、「座光寺・中島式土器様式圏の竪穴住居の床面は敲击床で非常に硬く、柱穴、柱痕が明瞭に観察でき、丹保遺跡の発掘調査では柱痕の平面形は長方形、主柱穴は円形であることが確認できた。柱痕は「割材使用」と報告した<sup>(52)</sup>。」ということである。

南信では、後期を通じて五平柱を主柱として採用しつつも、柱穴の平面形状は他の五平柱波及地域とは異なり、円形の柱穴を掘って長方形加工した柱を立てていたことが判明した。こういった状況を見ても、上田・長野盆地で五平柱が採用されなかったとは断じきれないのである。

#### (4) 西(東海以西)からもたらされたもの

##### ① 方形周溝墓(図21)

佐久盆地は、千曲川流域では、唯一弥生時代の方形周溝墓を受容する地域である。その形態は四辺の溝がそれぞれ独立した東海地方が起源と考えられる「四隅切れ」タイプで、佐久盆地

では後期前葉の方形周溝墓が西一本柳遺跡<sup>(53)</sup>で見つかっており、以後後期後葉まで佐久盆地の墓制として採用し続けられる。

図 21 には埼玉・群馬・長野県の後期前葉の方形周溝墓と出土土器を示した。いずれも一辺 10 m に満たない四隅切れの小型方形周溝墓で、出土壺は頸部に櫛描簾状文、その上下あるいは下のみに櫛描波状文を施す共通要素をもっている。四隅切れ方形周溝墓の存在は、佐久盆地の関東的な一面をみることができる。

## ② 環濠集落 (図 22)

後期後葉≡樽式 3 期には長野県千曲川流域で環濠集落が再登場する。長野盆地では篠ノ井遺跡群<sup>(54)</sup>、佐久盆地では西一本柳遺跡、北一本柳遺跡、西一里塚遺跡<sup>(55)</sup>、戸坂遺跡などがある。群馬県でも高崎地域では日高遺跡<sup>(56)</sup>、甘楽・富岡地域では丹生屋敷山遺跡<sup>(57)</sup>、利根・沼田地域では日影平遺跡<sup>(58)</sup>等で環濠集落が再登場する。期を一にした現象である。

西一本柳遺跡は 255 × 190 m と北一本柳遺跡は 370 × 200 m 両方とも大きな環濠で、両遺跡は 50 m の間隔を置いて東西に並んでいる。私は土器様相から北一本柳が古く、西一本柳が新しいと見ている。西一里遺跡の環濠は 150 × 80 m で、その 2 倍前後の規模がある西一本柳・北一本柳ともに後期後葉の佐久盆地では最も大きな集落であったといえることができる。

当時、佐久盆地でもっとも大きな集落から伽耶産の板状鉄斧が 2 本出土し

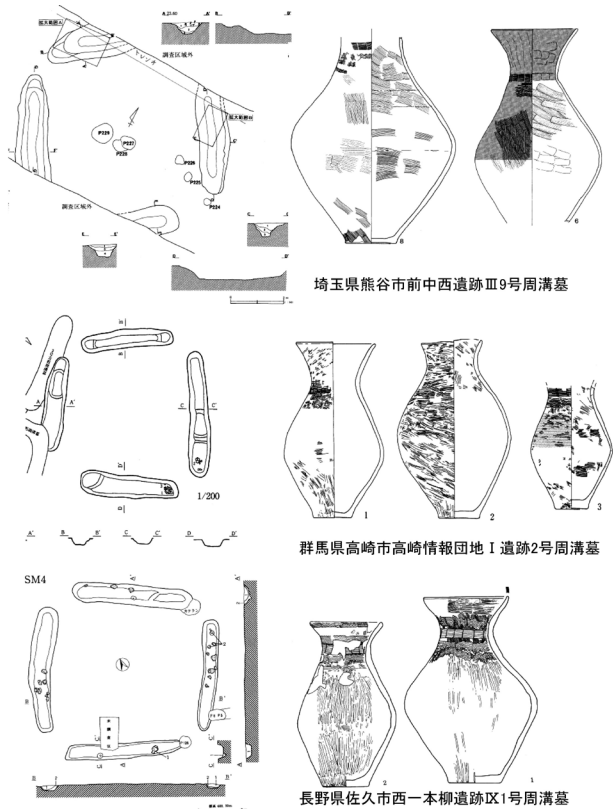


図 21 弥生時代後期前葉≡樽式 1 期における埼玉・群馬・長野の方形周溝墓と出土土器 (吉野 2003、柿沼恵介他 1999、森泉 2004 から転載)

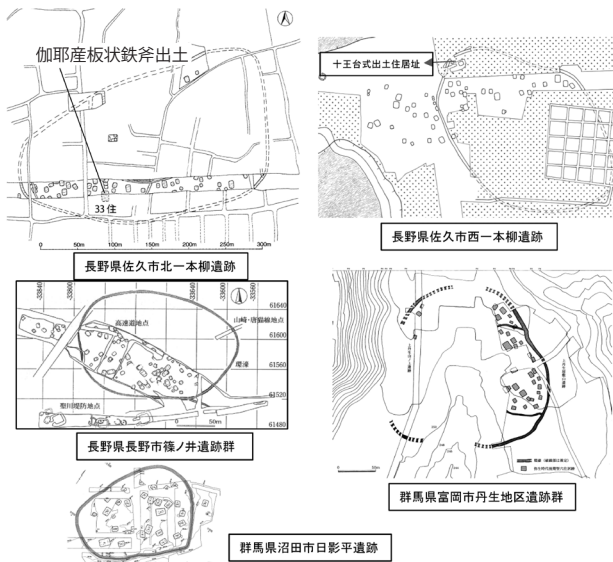


図 22 後期後葉≡樽式 3 期における環濠集落の再出現 (長野市 2000、小池雅典 2003、永井 2009 から転載)

た。板状鉄斧2本が出土した北一本柳遺跡33号住居址は平面長方形の竪穴住居で長さは推定で14メートル、幅7.47メートルで、西近津遺跡の18.1メートルには及ばないが、北一本柳遺跡の環濠集落内では最大級の住居であり、舶来品の板状鉄斧の保有から物流を差配できるような上位階層者の居宅であった可能性が高いと考えられる<sup>(59)</sup>。

板状鉄斧は朝鮮半島から直接もたらされたものではなく、日本海側から太平洋側を縦貫する金属器の伝播ルートを通して長野県の吉田・箱清水式土器文化圏の最奥部の最も大きな集落にもたらされたと考えられる。弥生時代の大きな集落は鉄製品をはじめ当時の物流拠点になっていたと考えてよい。

また、西一本柳遺跡の環濠集落内の竪穴住居址からは、前述の茨城県北部の十王台式土器が出土した。当時佐久地域で最大の環濠集落は、遠く他地域から交易に来た人を受け入れる役割も果たしていた。

### (5) 自生の墓 (図23)

長野県千曲川流域では弥生時代後期中葉以降、埋葬主体を整わない円形の溝で囲った墓が作られた。これを「円形周溝墓」と呼んでいる。墳丘の直径5m内外の小規模な首長墓である。富沢一明は円形周溝墓の起源が佐久盆地にあった可能性を指摘している<sup>(60)</sup>が、同じくらしい時期の円形周溝墓が、山梨県金の尾遺跡<sup>(61)</sup>にもあることから、この点についてはもう少し調査資料の蓄積を待って結論を出したい。

弥生時代後期吉田・箱清水式土器文化圏の千曲川流域に敷衍した円形周溝墓が樽式土器様式圏に波及した。

吉田・箱清水式と樽との間で周溝の共通性はあるが、埋葬主体は少し異なる。箱清水の円形周溝墓の埋蔵主体は木棺墓であるのに対し、樽式の渋川市有馬遺跡から見つかった埋葬主体は礫をお棺の底面に小石を敷き詰

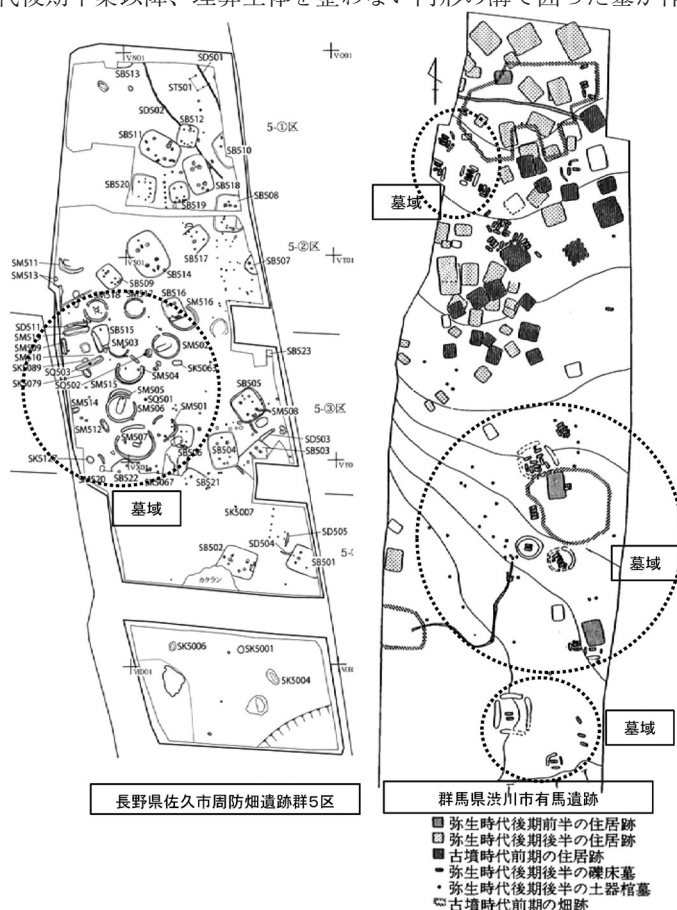


図23 長野と群馬の円形周溝墓 (上田2013、佐藤1988から転載)



めた礫床木棺墓である。礫床木棺墓が、栗林式土器文化における礫床木棺墓の系統をひいたものか、あるいはまったく新来の墓制を受容したものであるかについても今後の検討課題である。

## 7. 結語

江戸時代に松代藩と沼田藩は真田一族によって統治された。佐久米は、養蚕や麻の生産が盛んな群馬県下仁田に運ばれ、その戻り荷は、江州（近江の国滋賀県）や越中に運ぶ麻布だった<sup>(62)</sup>。

群馬県高崎市かみつけの里博物館から依頼を受けた連続講座『ゆくものくるものー北関東の弥生文化ー』の図録に掲載した「長野県各地の弥生土器と隣接地域間交流」は、それよりもずっと以前の弥生時代から長野と沼田、佐久と甘楽・富岡地域一円の関係が密接だったことを伝えることを主眼として執筆した<sup>(63)</sup>。

しかし、調査をすすめるうちに、後期後葉＝樽式3期になると交流の範囲が隣接間にとどまらず拡大されていった事実を触れないわけにはいけなくなった。本稿は2016年1月31日の連続講座の発表内容をまとめたものである。

長野盆地への北陸系土器移動は越後だけの段階から越中にまで拡大し、これに伴って鉄剣・鉄釧・銅釧・ガラス玉の威信財が豊富にもたらされ、首長層の墓に副葬された。首長層の墓域から威信財とともに出土する人形土器もやはり北からもたらされたものであろう。これが菅平経由で群馬県渋川地域をはじめ群馬県東部一円にも波及した。また、北陸系土器の移動地とはならなかった佐久盆地の首長層へも鉄剣・鉄釧・銅釧・ガラス玉の威信財や人形土器は導入された。甘楽・富岡地域、さらに吉ヶ谷式土器分布圏における威信財の存在は、佐久を経由してもたらされた可能性が高い。

鑿などの鉄製工具を制作するに足る伽耶産の板状鉄斧が佐久盆地の環濠集落で確認された事実は、十王台式の人々が鉄素材や製品を求めて吉田・箱清水や樽の土器様式圏へ訪れたことを推定する説を後方支援する。

以上の北からの移動に対して、住居の建築材は南からもたらされた。五平柱については南関東から遡上して山梨県・長野県では諏訪湖盆に入り、これを起点として長野県では南信・東信（佐久盆地）へと波及していった。今回樽式土器様式圏の各所を調査したところ、佐久盆地経由で樽式3期に五平柱が群馬県域へもたらされ、広く受け入れられた様子がうかがえた。この点については別稿で集成して改めて論じたい。

吉田・箱清水式と樽式における方形周溝墓、環濠集落のあり方は、改めて両土器様式圏が西日本の弥生社会の波動の東端に位置していることを再認識させた。

今後は、両土器様式圏の弥生後期～古墳時代前期の集落の盛衰を分析して、大型古墳築造との関連を考察してみたい。

本稿は家族の協力で書き上げることができた。また、多くの方々から教示を得た。期して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

大塚昌彦、大木紳一郎、小池雅典、井上慎也、飯島克己、柿沼幹夫、村田健二、深澤克仁、鈴木素行、

山下誠一、直井雅尚、小池岳史、土屋積、尾見智志、小林真寿、富沢一明、森泉かよ子

## 註

- (1) 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号
- (2) 若狭徹・飯島克巳 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号
- (3) 大木紳一郎 1997「第2節 弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (4) 千野浩 1987『吉田高校グラウンド遺跡』2001『吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
- (5) 小林真寿 1999『西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』佐久市教育委員会
- (6) 柿沼恵介他 1999「高崎情報団地Ⅰ遺跡」『高崎市史』
- (7) 吉野健 2003『前中西遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会
- (8) 直井雅尚 2001「弥生中期から後期へ」『長野県考古学会誌』93・94号
- (9) 山下誠一 1999「南信南部一飯田 8P「丹保・恒川遺跡群」『長野県弥生土器集成図録』長野県考古学会弥生部会 に掲載された資料だが、今回山下氏のご厚意で原図のトレースを掲載させていただいた。
- (10) 直井雅尚他 1996『竹淵遺跡Ⅱ』松本市教育委員会
- (11) 青木一男 1998「5 長野盆地南部における後期編年」『松原遺跡 弥生・総論6 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (12) 拙稿 2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落」『専修考古学』第15号
- (13) 小池岳史 2011「諏訪湖南地域の後期弥生土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散 資料集』山梨県考古学協会
- (14) 高林重水 1981「第3節弥生土器」『橋原遺跡』岡谷市教育委員会
- (15) 山下誠一 1999「飯田・下伊那の弥生土器」『99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- (16) 宇賀神誠二 1998「第16節 上木戸遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2一塩尻市内その1』
- (17) 宮坂虎二 1983「岡屋遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』
- (18) 若狭徹 2014「群馬県域「樽式」の土器と社会」『公開講座ひたちなか市の考古学第6回 弥生時代の北関東』
- (19) 前掲註(3)
- (20) 前掲註(12) 長野県各地の弥生後期集落の分布図については鋭意作成中で、別稿に掲載する予定。
- (21) 前掲註(14)
- (22) 鳥羽嘉彦 1987『田川端・宗張』塩尻市教育委員会
- (23) 直井雅尚 2015『出川西遺跡』松本市教育委員会
- (24) 今村峯雅・松木武彦 2009「②炭素14年の記録から見た自然環境変動」『弥生時代の考古学4 古墳時代への胎動』同成社 36p
- (25) 前掲註(3)
- (26) 佐藤明人 1988『新保遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

- (27) 小島敦子 2009『荒砥前田Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (28) 林幸彦 1996『濁り遺跡』佐久市教育委員会
- (29) 遠藤英子 2015「大豆田遺跡 N 出土蓋形土器残存圧痕のレプリカ法調査」『周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅳ』
- (30) 田嶋明人 2009「古墳確立期土器の広域編年-東日本を対象とした検討(その3)-」『石川県文化財情報第22号』
- (31) 平林大樹 2014「Ⅳ遺物 3 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器」『長野女子高校校庭遺跡』長野市教育委員会
- (32) 小池雅典 1990『町田小沢遺跡』 1994『町田小沢Ⅱ遺跡』 2003『日影平遺跡』沼田市教育委員会
- (33) 前掲註(3)
- (34) 富沢一明 2015「弥生後期の縄文施文土器について」『周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅳ』
- (35) 鈴木素行 2011「富士山のイモガイ」『茨城県考古学協会誌第23号』
- (36) 岡田正彦 1983「滝沢井尻遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』
- (37) 吉原佳市 2002『根塚遺跡』木島平村教育委員会
- (38) 野島永 2004「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」『河瀬正利先生退官記念論文集』
- (39) 高橋桂 1982「須多ヶ峯遺跡」『長野県史考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(東北信)』  
その南に中島庄一 2011『五里原遺跡』中野市教育委員会がある。
- (40) 福島永 2013「上伊那の弥生集落-辰野町 荒神山おんまわし遺跡-」『長野県の遺跡発掘 2014 遺跡報告会資料』長野県埋蔵文化財センター
- (41) 富沢一明 2004『後家山遺跡・東久保遺跡・宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』
- (42) 白居直之 「再生される銅釧」『長野県埋蔵文化財センター紀要8』
- (43) 若狭徹 「北関東の弥生社会」『古墳時代の水利研究』学生社
- (44) 柿沼幹夫 1994「「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証! 関東の弥生文化』埼玉県立博物館
- (45) 櫻井秀雄 2015「人形土器の研究」『金沢大学考古学紀要36』
- (46) 深澤克仁 2015「新たな時代の到来を予感した“樽の人々”」『ゆくものくるもの』かみつけの里博物館
- (47) 森泉かよ子 2010『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅣ・北一本柳Ⅲ・東大門先Ⅱ・西八日町Ⅲ・Ⅶ』佐久市教育委員会
- (48) 村田文夫 2007 A 「堅穴住居址から発掘される五平(状)柱に関する研究」『列島の考古学Ⅱ』渡辺誠先生古希記念論文集  
村田文夫 2007 B 「東泉寺上遺跡から発掘された五平(状)柱を主柱に据える弥生期の堅穴住居址」『川崎市宮前区東泉寺上遺跡D地点発掘調査報告書』川崎考古学研究所
- (49) 穴戸信吾 1989『砂田台遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター
- (50) 柳沢亮 2015『西近津遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
- (51) 小池岳史の教示
- (52) 山下誠一 1989『丹保遺跡』上郷町教育委員会
- (53) 森泉かよ子 2004『西一本柳遺跡Ⅹ』佐久市教育委員会
- (54) 西山克己 2011『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 長野市内その4 篠ノ井遺跡群』長野



県埋蔵文化財センター

- (55) 森泉かよ子 2015『西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅰ』佐久市教育委員会
- (56) 大江正行 1982『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (57) 永井尚寿 2009『丹生地区遺跡群』富岡市教育委員会
- (58) 小池雅典 2003『日影平遺跡』沼田市教育委員会
- (59) 高久健二 2014「朝鮮半島南部地域における板状鉄斧」『佐久考古通信』№ 113
- (60) 富沢一明 2012『周防畑遺跡群若宮遺跡Ⅳ 道常遺跡 南近津遺跡Ⅲ 宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市教育委員会
- (61) 末木健 1987『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
- (62) 市川武治 1993「近世 第三章 第三節 上信交流」『東村誌』
- (63) 拙稿 2015「長野県各地の後期弥生土器と隣接地域間交流」『ゆくものくるもの』かみつけの里博物館

参考文献

- 和久震平他 1983『井出村東遺跡』群馬町教育委員会
- 八幡一郎 1983『南佐久郡の考古学的調査』
- 若狭徹 1988「諸口Ⅰ遺跡の弥生時代の遺構と遺物」『西浦南遺跡』群馬町教育委員会
- 坂井隆 1995『中高瀬観音山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 青木一男 1998『松原 弥生 総論6 弥生後期・古墳前期』
- 長野県考古学会弥生部会 1999『長野県の弥生土器』
- 長野市 2000『長野市誌』
- 小林修他 2005『見立相好遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教育委員会
- 上田真 2013『周防畑遺跡群』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 小安和順 2014『白倉上野遺跡(下小塚Ⅴ遺跡)』甘楽町教育委員会